

「すぎる」は及ばざる気持ちを補う？

ある番組が、「世界一透明すぎる海の秘密」というタイトルで放送されていた。「透明すぎる」？ しかも、「世界一透明すぎる」？

「食べすぎる、長すぎる、うるさすぎる、高価すぎる、…」等、「～すぎる」ということは動詞や形容詞などについて複合語をつくる。これまでは「度をこす」(『三省堂国語辞典』第7版)という意味、すなわち、適度な(好ましい)状態や基準を超えてしまっているという意味で使われていた。しかし最近、「〔俗〕〔ほめて〕ひじょうに…だ」(同上)という意味で使われる例が出てきている。冒頭の「透明すぎる」もこの用法で、この表現には、「とても透明な」「すごく透明な」などのありきたりな表現では伝えきれないほどの、さらには「世界一透明な」と言ってもなお及ばないようなとびっきりの透明度をもつ海であることを伝えたいという思いがこめられているようだ。番組で紹介されていた海は、確かにその思いがわからなくもないほど透明な、それゆえに美しい海で、番組内では「すごすぎる透明度!」とコメントされていた。

この「ひじょうに～だ」の意味での「～すぎる」は、ブログなどでよく見かける。「〇〇が大好きすぎる私」「欲しすぎる」「楽しみすぎる」「ステキすぎる」「激かわすぎる(=とってもかわいい+すぎる)」「ツボすぎる(=

ツボ(好みに合う点)にはまる+すぎる)」…など、さまざまなことばと結びつく。多くは、その対象のことをとても好きだったり気に入ったりしているのだが、「大好き!」「すごく欲しい!」「超ステキ!」などの既存の表現にはおさまりきれないもっともっと強い気持ちがあり、その“及ばざる”気持ちをなんとか補いたいゆえに「～すぎる」という表現が選ばれているように思える。そこには、敬語を使っているうちにその語に備わっていた敬意がすり減っていく“敬意低減の法則”にも似た、愛着の気持ちを表すことばや賛辞から称賛の度合いがすり減っていく“称賛度低減の法則”とでも呼べるようなものがありそうな気がする。

「透明すぎる」「すごすぎる透明度!」は、「～すぎる」を「度をこす」の意味だけで使ってきた人々にとっては、今のところ許容できない表現かもしれない。やはり、「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」か。

しかし一方で他の言語に目を移してみると、「～すぎる」と翻訳される英語の「too～」や中国語の「太～」も、同じように「度をこす」の意味に加えて称賛の意味をあわせもっているようだ。「～すぎる」が及ばざる気持ちを補う表現として定着する日は、意外と近いかもしれない。

太田眞希恵(おた まきえ)